

「夢結ぶ寺 是字寺（龍海院）」

龍海院

副住職 池田友厚



今日お話をさせていただきますのは、この龍海院（是字寺）というのが一体どういうお寺なのか。東岡崎駅の駅のすぐ裏にあって北向きに本堂が向かって、ですから名鉄電車で東岡崎から名古屋の方へ向かって行くと、この正面の鉄橋でもってちょうどこの本堂が見えて、よく知らない人からあの建物何なんだろうかねというふうに聞かれるんですけども。このお寺の由来、あるいはどういう宗派でどういう教えの元に日常宗教活動をやっているかなど。それから江戸以前からのお寺でありますので、色々なお方のお墓があります。どういったお墓があるか、あるいはどういった石碑、碑文があるかと、そういったことを紹介させていただきたいと思います。私、学者ではありません、僧侶ですので、「説教師、見てきたような嘘を言い」という川柳がありますけれども、史実と若干異なっている部分があるやもしれませんが、そういったことは皆様を禅の道に導く僧侶として許されていることということで今日はお許しさせていただきたいと思います。

1. 松平家の変遷

松平清康公がこのお寺を建てたのですが、松平家というのは足助の奥の方にある松平村が発祥です。その以前、じゃあ松平の祖先はどこからどういうふうに松平郷に流れついてきたかということから申しますと、やっぱり関東の方からだそうです。関東の方から時宗、いわゆる南無阿弥陀仏とお唱えする宗派でございますが、その時宗の僧侶として説法を説きながら、あるいは色々なお宅で食べ物をいただき、ずっと流れてきて落ちてきた先が松平郷ということだそうです。関東上野国、得川郡というところの出なんだそうですけれども、松平に流れ着いてその有力者でありました太郎左衛門信重という方がいらっしやいまして、その養子婿に入った。お寺さんですから筆が立つし、文化の素養もあったようで連歌ですとか、そういったものに非常に造詣が深かった。それから非常に慈愛に満ちていた方で、それこそ自分も乞食坊主でありながらここに養子婿に入れていただいたという恩義を非常に深く感じ、慈愛を深く感じ、訪ねてくる見知らぬ人も泊めてあげたりだとか、あるいは道がなければそこを広げて道を作ったり、橋がなければそこへ村人と一緒に橋を架けたりと、そういうことをしていった次第に松平における評判を、信頼を高めていった。その方が初代の松平だそうですね。僧名徳阿弥という方だったそうです。

それから三代下りてきまして、三代目が信光公ですね、松平信光公。この時まで初代の徳阿弥の評判を落とすことなくずっと松平において信頼を勝ち得ていった。そして同時に二代目辺りから武将となって、いわゆる豪族となって、武力も身に付けていき、三代の信光の折に三河の中心である安祥城、安城の地にある安祥城ですね、そこに入っていった。安祥城というのはご存じかと思うんですが、畠山一族の和田親平公が、15世紀の初めに建てたお城なんですけれども、そこへ三代目の信光が入っていった。それ以

降松平の宗家と申しますか、嫡男がずっと継いでいる家系は安祥城になっていくわけですね。

そこからレジュメの方に入っていくんですけども、五代目に道関という、これは武士の頃は長忠と言ったんですけども入道しまして、お坊さんになって道関と名乗っていた。これが清康公のおじいさんにあたる方です。それからその道関の兄弟では信貞という方がいらっしゃいます。この信貞公はいわゆる松平の宗家ではないわけですね。道関が宗家を継いでおりますから弟君で山中城、それから岡崎城の城主をしておった。それから六代目に信忠という方がいます。道関の時代には非常に三河の城下の人達の信頼熱く、また治安も安定していたんですけども、その道関の後を継いだ信忠という方が酒におぼれ、色におぼれといいますか、政治を顧みることなく治安が非常に乱れてしまい、家臣達も離れていってしまったという状況にあったんだそうですね。これでは松平宗家が駄目になってしまうという信忠のお父さん、道関、入道道関の考えで、まだ13才であった清康公を松平家の宗家の君主としようという提案を致します。その時に清康公を七代目にしようという動きと同時に13才ではまだあまりにも早すぎるから、道関の弟君である信貞、山中城、岡崎城の城主である信貞公に後を取らせようとか。それではちょっと年が行き過ぎているから六代目の信忠の兄弟である信定、これは西尾の桜井ですね。そこを本家としておった、やはり宗家ではない派なんですけれども、桜井の松平というふうに呼ばれております。この信定君に後を継がせようと、色々な話があったんですけども結局は13才にして清康が安祥城の城主となった。その折に安祥城の天守閣広間において真ん中に入道道関と、それから六代目の信忠が座り、その正面に清康が座った。その場に山中城、岡崎城の城主である、清康からいいますと大叔父にあたる方ですね、この信貞。この方がその後を取る跡目の儀式に参加して居なかったんですね。そこで清康が六代目の信忠からお前に跡を譲ると言われると、まず第一におじいさんである道関、それからお父さんである信忠に対して13才ではあるけれども、「この城の君主となったからには、これから私のやりたいようにやらせていただきますので、どうか温かい目で見てください。」と宣言をされた。それから叔父にあたる桜井の松平信定に対して、これからは後見人としてひとつ宜しく願いますよというふうに言った。これも実は松平、桜井の信定にとっては清康公が後を継いだということはあまり本意なことではなかったんですね。ですから謀反を起こしかねない。そのことを清康は分かってあって、釘を刺すがごとくにこれから後見人として温かく私を指導してくださいよというふうに言ったと。それから最後に父親に対して、「岡崎城主の信貞公が来て居ないけれどもこれはどういうことか。松平宗家の跡目儀式に参加しないとどういうことか。何か聞いておりますか。何か狙いがあるってここに来させずにおったんですか。」というふうに父親に問いました。これもこれから松平宗家の跡を継いだからには、宗家にあとの枝のいわゆる新家は従ってもらいますよという宣言であり、また山中城、岡崎城主の信貞に対してこういう非礼は決して以後するなということを間接的にみんなの前で宣したということになるわけでございます。

1523年に13才にして安祥城の当主となった。それから1524年の14才の折には結局、その跡目の儀式に参加しなかった岡崎・山中城主の信貞公がそれ以降もなんだかんだと清康に対して良い姿勢を取って来なかったんで、内から水が漏れたんでは困るというこ

とで、14才の折に山中城、岡崎城をあっという間に奇襲戦法でもって攻め落とします。その折にそれまでの信貞公、これは大叔父にあたるわけですが、私は負けたんで額田の方にでも蟄居しようと思うと。ついてはひとつ頼み事があるんだが聞いてくれんかということで、信貞公の娘である、於波留という方、清康の七代清康の右側に女性の名前が4名ずらずらと並んでおるんですが、その一番上に於波留と書いてあります。この方が岡崎城主の信貞の娘であります、この於波留を嫁にしてくれんか。そうすれば私は嫁の父親ということで負けはしたけれども一応の面目が立つからと。それから私の家臣も娘が嫁に嫁いでおるということであれば、負けた武将ではあるけれども自分の今までの大将の娘の嫁入り先だということで、これからも清康公にしっかりと忠心を尽くすであろうということで於波留を嫁にもらいます。

於波留を嫁にもらう前から清康公の身の回りの世話をしておった女性が居るんですね。それがその下に書いてある留め女、あるいは留めというふうに言うんですけども。この留め女を清康公が非常にお気に入りであった。身の回りの世話をし、それから初めて女性を知ったのもこの留め女による、留め女が初めての女性であったということも聞いております。それで於波留と結婚した以降も、留め女の家への通いもそのまま続けたということなんですね。もちろん於波留は於波留として正室として愛しておったんですけども、留め女と比べて非常に表情の薄い、何を考えているかわからぬような美貌ということだったそうです。その何を考えているのかよくわからない、喜怒哀楽が非常に乏しい於波留よりもやはり清康にとっては留め女の方が良かった。それで留め女の方を可愛がるんですね。そうすると当然正室である於波留は焼きもちを焼くわけです。焼きもちを焼いた於波留は留め女を縛りあげて、鞭打って殺してしまうんですね。自分の非常に愛していた留め女を殺された清康公は非常に悲しみに暮れます。と同時に於波留をそんな気持ちにしてしまった。於波留にそういう気持ちを抱かしてしまった自分を責めるわけなんですね。於波留に対して、お前にした俺の行動がお前を傷つけているということが非常に申し訳なかった。詫びる部分は確かにあるけれどもお前をこのまま正室として置いておくわけにはいかないということで、於波留と離縁致します。

留め女が亡くなった悲しみに浸りながら毎日安祥城で暮らすわけなんですけども、どうも安祥城には留め女との思い出があまりにも多すぎるんで、大叔父である信貞から奪い取った山中城へ、名電山中の上にあったお城ですね。山中城へ移り住みます。それで山中城を本拠として足助城を攻め落とす。山中城を落とし、岡崎城を落とし、妻をもらい、妻を離縁し、それから山中城へ移し、その後足助城を攻め落とす。これだけのことを1524年の14才の年にやりおすんですね。ものすごいバイタリティのあった方だと思わなすけれども、足助城の城主であったのは鈴木重政という方なんですけども、それを蟄居させて足助城を自分のものとする。翌年、1525年になるんですけども、山中城で西三河の方を安定させてきたけれども家来にとっては、君主に跡取りが居ないというのは非常に不安なこと。戦国時代のことですから、もしこの人が矢に当たり、あるいは槍に刺され死んだらその後はどうなるんだろうかっていうのは非常に家臣達にとっても不安な材料であったので、そこで非常に忠心をもって清康に務めていた家来であった青木貞景、右側に書いてありますが、青木貞景の娘を嫁にもらいます。そうすると翌年1526年に青木貞景の娘との間に仙千代、これが八代目の広忠になるのですが、

広忠を儲ける。ところが産後のひだちが悪くて青木貞景の娘は広忠、仙千代を産み落とすと間もなく死んでしまう。そうするとまた折角子供を産んでくれたのに亡くなっちゃったなあという悲しみに暮れる日々になる。そこでその悲しみを吹っ切るために、こんどはいよいよ岡崎城へやってくるんですね。

16才の折、山中城で広忠が生まれ、その母である妻を亡くした清康は16才で岡崎城にやってくる。その岡崎城へやってきて散歩に出た。その岡崎城で家来からの紹介によって例の服部半蔵ですね、伊賀の忍者、服部半蔵との出会いがあるわけですね。服部半蔵を山中城の戦いの前から雇っていたようなんですけども、半蔵は忍者ですからお金さえ積んでもらえばこの君主の元にも家来として動く、そういった身分の者だったんです。普段雇われた人からこれだけの金をやっているんだから命をかけてもこの任務を遂行するんだぞと、必ずそのようにきつい言葉を言われておったんですけども、清康公は半蔵に対して、「俺の為に働く以上は譜代の者と、俺の家臣と同様お前も大切な家来だ。無理をして命を粗末にするようなことは決してあってはならんぞ。」というようなことを言った。そうすると今まで半蔵はそんな命を粗末にするなど、命をかけて使命を果たせとは言われておったものの、命を粗末にするなど言われたのは初めてであって、忠心をもってこれは清康公に仕えねばならないと思ったと同時に、半蔵はこれが清康公が天下を取るには一番の弱点になるかもしれないなということを感じたというふうに一生涯懸命勉強した本の中に書いてありました。確かにある意味ももっとも冷徹、冷酷にならなければこの戦乱の世の中を渡っていけない中で、非常に慈愛に満ちた、後に秀吉に家康公がお前の宝は何だと聞かれた時に、私の宝は家臣達ですというふうに答えた。これはもう松平家代々のものだと思うんですけども、でも清康公が天下を取れなかったひとつの原因として家臣達に愛情を注ぎ過ぎる。周りの人達に愛情を注ぎ過ぎると、そういうところがあったのではないかと半蔵は感じ取った。でもとりあえず、この人の為に命をかけて働こうという決心がその言葉によってついたというふうに半蔵が言ったと伝えられておるんですけども。

その半蔵と岡崎城下を散歩しておりました折、雨が降ってきた。伊賀八幡ですね、伊賀町にある伊賀八幡、あれが松平家の軍神でありまして、戦いの折にはあそこへお参りして出かけていくわけですが、その伊賀八幡で雨宿りしようということになって、半蔵と雨宿りしておると、やはり奥の方の門にもうひとかた雨宿りをしているご婦人が居たと。そのご婦人のことを遠目から見た清康公は思わず「お留め!？」というふうにつぶやいたというんですね。つまり自分の身の回りのことをしておってくれて、最初の嫁である於波留に殺されてしまったお留め。その面影を今も引きずっておったわけですが、その面影に似たところのある女性にそこで行き会うんですね。それがレジメの一番下にあるお富という女性、4名書いてある一番下にあるお富という方ですね、清康公の右側に書いてあります。戦国時代にあって絶世の美女というふうにされておるのですが、この方が気に入って、側室ではなく正室として迎えるわけですね。俺の嫁になれということで、当時のお殿様、何でもやりたいことがやれたわけで、「明日から城に来い。」と言われれば、「ははあ。」と言わざるをえない状況にあった。しかしながらお前を嫁にして一生懸命可愛がる。「でも私は離縁された身であり、もう結婚生活せずにごこのお寺に入って、お寺で静かに余生を送りたいと思います。」と言ったら、「それじゃあ気に

いらんかったら出ていっても良いからとりあえず岡崎城に來い。」というように言った。岡崎城へ正室として迎えます。この方がお留めに似ておって、戦国時代にあっては絶世の美女であった。何か不吉な予感がする程の美しさであったというふうに言われておるんですけども、この方を嫁にしました。実は刈谷城主で水野忠政公の妻であった方。水野忠政公とお富の間に生まれたのが於大の方なんです。於大の方は広忠のお嫁さんになるわけですね。ここが非常に全然知らぬ一人の美しい女性に清康公が惚れて結婚した。その女子は実は刈谷の水野忠政公と結婚しておって子供を儲けておった。水野忠政公が織田家の方との縁が深くなったということで、三河の方にお富は帰ってきた。でも子供は置いてきた。その子供の中に於大の方という方がおって、それが広忠と結婚して徳川家康を生むということになるんです。ここにその伊賀八幡でたまたまお富と会ったということの偶然っていうんですか、巡り合わせっていうんですか、非常に不思議なものを感じますね。

2. 松平清康公と『是字寺』

このお富と夫婦となって享禄3年、西暦で申しますと1530年になるんですけども、ここでやっと龍海院が出てきます。大変お待たせ致しました。清康公が享禄3年20才の折なんですけれども左手に是の字を握る初夢をお正月に見た。「左手に是の字を握る夢を初夢に見た。」これはどういうことかと非常に気になって色々な占い師さんだとか、識者だとか、そういった人達に聞いたけれどもどうも分からない。当時非常に高德で名が通っておった足助のちょっと手前、細川のちょっと奥に桑原という場所がございます。あそこに龍溪院というお寺がございます。皆様もご存じの方が沢山いらっしゃると思うんですけども、この龍溪院というのは、曹洞宗、永平寺を総本山とする曹洞宗の地方本山格の大きなお寺でありまして、輪番制と申しまして、そのこの住職は何年か毎にその末寺住職が順番に交代で出るというお寺でありました。たまたま享禄3年の年の龍溪院の住職は渥美の田原にあります、長興寺というお寺、この長興寺の住職が輪番、当番にあたっておりまして、この桑原の龍溪院の住職として出ておりました。その方が非常に徳の高い、また知識と教養のある方だという事を清康公は聞いて、その方を訪ねました。訪ねるといふかまあ殿様ですから来いと命じたんでしょね。「こういう夢を見たんだけど、これはどういう意味か。」というふうに尋ねました。そうしましたら、「是という字を分解しますと、日の下の人と書くと。つまり日の下の人、天下人を意味する。この天下人を意味する是の字を手中にしたということは、清康公あなたか、遅くともあなたから三代までにはきっと天下人が現れるであろうと、そういう吉夢でございます。」というふうにご龍溪院の住職、模外惟俊という方なんですけれども、模外和尚がそういうふうにご夢判断をなされたんですね。それは良い夢だという事で、「お前に一寺建立してやろう。」と。そうですねお金いっぱいあるから、ハイやれと言えば簡単に出来ちゃうんですね。ただ戦国武将にとってはお寺というのはやはり砦の一つになりますから、お城の周りに出来るだけお寺を造っておきたいという気持ちもあったんですね。それもありまして、それ以上に是の字を握る、天下人が出るというふうにご占ってくれた模外惟俊に対して、今まで色々な占い師にご占ってもらったけれども、知識の高い人に見てもらったけれどもわからなかった。それを即答してくれた人に対して一寺を建立し

てやろうということで建てられたお寺がこの是字寺なわけでございます。

本堂と言いますと大体が南面しております。つまり南に向かって建てられております。ところがここは北面しております。つまり岡崎城があちらにありますから、岡崎城に背を向けるわけにはいかないということで、本堂としては忌み嫌う方角である北面、北向きに建てられているお寺でございます。模外惟俊の占い通り、それから二代後と申しますか、あるいは三代目、徳川家康公が見事に天下を掌握するわけでございます。

その是の字の初夢を見た。そして模外惟俊和尚にこれは天下人の吉兆でございますというふうに占ってもらったその年に、清康公は更に怒濤の如く東三河の方に自分の松平家の地を広げようということで、まず宇利城、宇利トンネルというのがございますね。あそこの宇利城を攻め、それから豊橋に入る橋の袂にある吉田城ですね、今も吉田城は城郭が残っておりますけれども、吉田城を攻め、それから田原城も、つまり渥美の田原ですね、田原城も攻め落としたということでございます。更に更に勢力を伸ばしていったというふうに理解して良いかと思えます。

田原城を攻めた時に、田原城の城主が戸田康光、広忠の右にレジュメには書いてありますけれども、真喜姫、(田原城主 戸田康光の娘)と書いてありますけれども、田原城を攻め落とした時に、戸田康光は抵抗しませんと。白旗を振りました。何ら抵抗することなく、あなたの下に屈します。その代わりと言っては何ですが、私の娘をあなたの息子の嫁にしてもらえませんかという約束の下で無抵抗で田原城を引き渡したんですね。ですからその約束どおり仙千代、広忠が大きくなった後、この田原城のお姫様である真喜姫を於大の方の次の正室として迎えるわけですね。レジュメになりますと八代広忠の左に真喜姫がある。右側に於大の方が書いてある。この於大の方が最初のお嫁さんになるわけですね、広忠公の。この於大の方は、お父さん清康の奥さんお富の娘であります。つまり清康の奥さんの子供である於大の方と広忠は結婚した。つまり今で言えば義理の兄弟と結婚した。これは刈谷城主水野忠政の娘である。水野忠政が先ほどもちょっと申しましたけれども於大の方と結婚した後、織田家と手を結ぶ、そういう動きになっていったので、於大の方がおってはちょっとまあ変な言い方ですが邪魔になる。当時女性は須く政略の駒に過ぎなかったという部分があるわけで、織田家と手を結ぶからお前は離縁するぞという形で離縁されてきたわけですね。広忠と於大の方と結婚してそれで家康を生んだ。家康を生んだ後、於大の方の父親である刈谷城主である水野忠政が織田家と手を結ぶようになった。織田方に付かれたんではどちらかということ今川方であった広忠としてはこれはどうも調子良くないので於大の方を於大の方の出である緒川へ帰され、離縁した。その離縁した後、約束であった田原城主の真喜姫を嫁に貰ったということになるわけですね。

清康公に話を戻しますと、清康公は怒濤の如くの侵略をし、三河の地を安定していったんですけれども、更に安定の基盤を広めようと守山城へ。ここでいわゆる「守山崩れ」と言う事態へと流れが進んでいくわけですね。自分の叔父である信定、桜井松平の信定をやっつける為に守山城の方へ行く。そこを攻める為にお寺を借りて宿舎とした。そしてたら守山城には桜井松平の信定は居ないという情報が入って、それでは一旦岡崎に引き返しましょうということになった。岡崎城に引き返そうと思っていた時に、自分の家来である阿部大蔵の息子弥七郎というのが居るんですけれども、阿部大蔵というのは衷心

から清康を慕い、尽くしてきたんだけど、相手方の忍者のデマですね、阿部大蔵が清康に謀反を起こそうとしているぞというデマをずっと広げるんですね。こういうデマによる攻撃っていうのも非常に強い攻撃のひとつであったわけなんですけれども、阿部大蔵が清康公に謀反を起こそうとしているというデマが広がります。阿部大蔵はもうわんわん泣いて、こんなに衷心から清康公の為に働いているのに何ということかと。清康の方はそんなのはデマに決まっている。私は阿部大蔵を信じているというふうに言うんです。阿部大蔵の息子は「こんなにも尽くしているお父さんを謀反呼ばわりをするとは清康公なんたることぞ。」ということで、パーッと清康公の元へ行って、その時に岡崎城ではなくて、さっき申しましたように守山城を攻める為にお寺に宿泊しておりましたので、非常に警護が甘かった。そこの本堂の廊下の所に居る清康のところへザザザッと入って行ってスパッと切ってしまった。一撃で清康公は死に至ってしまった。非常に呆気ない25才での生涯を閉じることになってしまったわけなんです。

この清康公が建てたお寺が是字寺、龍海院。清康公の夢が三代後の家康公によって結ばれた、そのお寺。夢結ぶ寺、龍海院ということになるわけでございます。何で龍海院と名付けたのか。先ほど申しましたように、この是の字の夢占いをした方が模外惟俊。龍溪院に住んでおられたんですね。つまり溪は溪谷の溪、山ですね。龍溪院、足助の山の方に細川の奥に龍溪院があります。その末寺として建てる寺だから、蒲郡、海の方により近いお寺だからということで、龍溪院に対して龍海院と付けたということだそうでございます。ちなみに竜海中学校というのがありますが、これは戦後すぐひかれた6・3制の折に、上に三島小学校がありまして、その三島小学校の校舎の一部を借りて竜海中学が始まったんですね。その当時中学の名前はなかったんですけども、龍海院の山の上にある三島小学校の校舎の一部を借りて始まった中学だということで、竜海中学と名付けられた。もちろん今はすでにこの龍海山から向こうの山の方に移ってしまっただけなんですけれども、元々はこの上にあったと聞いております。

3. 龍海院にゆかりの人物

それからご存じの如く松平家の菩提寺は大樹寺様でございます。清康公が模外惟俊に帰依して一寺を建立して、模外惟俊のお寺の檀家になるうということを決めた折に、当時の大樹寺の御院住様でありました法誉上人という方、この方が松平代々高月院から大樹寺に移って以来、大樹寺がお奉りしております。そんなことのないようにということで、非常に悲観し隠居するという事件が起こってしまった。法誉上人が隠居されてしまって、そこまで上人を苦しめるのであれば私は浄土宗に戻ろうということで、松平清康公は浄土宗に戻って、清康公が建てたこのお寺をじゃあ誰に守らせるかということで、藩主で酒井雅楽頭正親公に仰せ付けるんです。2番のところに書いてありますが、上にお墓があるんですけども石柱で囲まれたお墓なんですけども。そこには雅楽助酒井正親と刻まれております。この方は清康公に仕え、広忠公が人質になった折に岡崎城へ戻ってくる、その時に非常に尽力された方ですね。この方の二代目、酒井家が正親公の子供の代に群馬県の前橋へ行くんですね。前橋城主となって行くわけなんです。その時に酒井雅楽頭の菩提寺であるからということで龍海院を前橋にもうひとつ作るんです。ですから龍海院というお寺は全国にそのふたつ。是字寺の岡崎龍海院、それから二代目の酒井

家が前橋城に移った時に、その城下に建てた前橋龍海院、このふたつがあって二代目からの酒井家は前橋の龍海院がお奉りをしているということになっております。一代目の酒井雅楽頭正親公のお墓はこの裏、この本堂の真裏辺りになりますけれども、そこに現存しております。

それから先程申しました田原城のお姫様である真喜姫、於大の方を離縁された後に八代目の松平広忠公が結婚した真喜姫、この方のお墓もここにあります。松平広忠公は大樹寺様が菩提寺です。つまり浄土宗です。その奥様である真喜姫がどうして大樹寺に奉られなかったか。これはやはり松平家が戸田家というものを、つまり田原城主であった戸田家というものをどういうふうに見ていたかということにあるのではないかなと。松平家と同じ寺にはお前は奉らせてやれないぞという部分があったのではないかと。まあ邪推かもしれませんが思っております。真喜姫の戸田家というのは今も脈々と続いておまして、たまさか今日お昼過ぎに神戸に住んでいらっしゃる戸田様から今日真喜姫のお墓お参りに行きますというふうに言ってらっしゃいました。酒井家はクリスチャンになっちゃったという話を聞いたことがあるんですけども、明治の時代ですかね。

あとお墓の紹介ですが、レジュメの4番目ですね。陸軍大将の土屋光春の墓、日露戦争の折の陸軍大将です。陸軍大将と言うと私なんかより皆様の方がご存じのことだとは思いますが、それこそ薩長、薩摩藩、鹿児島県か長州、山口県の出身の元士族、あるいは東京に住んでいる、江戸に住んでいる人にしか滅多になれない、乃木希典大将も山口県だったと思いますが、そんな指で数える程の人数しか居ない陸軍大将に岡崎出身の土屋光春さんがなられたということは、知っている方にとっては非常にものすごいことだということだそうですね。

それから5番目松下鳩台先生、これは藩校允文館、康生に允文館跡というのがありませんけれども、その先生をやっていた方です。

それから6番目に碑文、碑の説明があります。こちらから言いますと門の手前右側に碑がずらっと並んであります。その一番堀側からなんですけれども、原霞外の碑というのがあります。これ名古屋の豪商、大須のコメ兵、コメ兵へ売ろうというのがありませんけれども、あのコメ兵の、あれはもう明治時代からの豪商だったそうなんですけれども、その長男さんの碑なんです、原霞外の碑というのは、商売を継がずに雑誌記者をやって、それから新三河新聞の記者になって岡崎にやってくる。名古屋の方の新聞社で働いていたんですけれども、社会主義に対する弾圧というのが非常に厳しくなってそれで岡崎の方へ来たというふうには書いてありましたけれども、その方が非常に文化的な面においても優れておまして、例えば講談ですとか浪花節ですとか義太夫なんかをプロデュースする人として非常にその面で優れておった方で、岡崎の文化に貢献したという事で昭和6年に建立された碑だそうです。コメ兵の長男ということで、コメ兵で何かをちょっと買ってもらう時に「うちのお寺に碑がありますよ。」と言えは多少高く買ってもらえるんじゃないかなんてくだらんことを考えながら調べておりましたけれども。

それから次の堀から二つめに中井代助翁の碑というのがありませんけれども、この中井代助、だいすけでしょうかね、たいすけでしょうかね、この方は三龍社の関係の方です。

今のケーヨーデイツーの横に三龍社、養蚕ですね。絹を作っておった。蚕さんから絹を作っておった三龍社、そこが東京の方の中井代助、埼玉県なんだそうですけれども、その方を三龍社に呼んで蚕の飼育法の改善だとか品種の改良なんかを指導してもらった。この方の指導によって非常に優良品種が生まれて、アメリカへの輸出が劇的に拡大し、三河というのはどちらかというと綿作、綿の地域だったんですけれども、これ以降、養蚕、蚕、絹において全国屈指の絹の産地になったというふうに言われております。

その隣には駅長一之瀬嘉吉の碑というのがあります。これは岡崎駅が町の中心から4キロも離れている所に作られてしまった。そうするとあそことの間を荷馬車でもって往来して中心へ荷を運ばなければいけない。その為に非常に駅長さん、一之瀬さんという駅長さんが便宜を図ってくれたということで、その輸送組合というんですかね、駅長さんの為に碑を建てたんだそうです。その隣には一之瀬家のお墓が大きなお墓があります。これはまあ個人のお墓というふうに考えています。

その隣に宝篋印塔があります。本来は宝篋印陀羅尼という経文を納めてお寺を守ってもらうという目的だったんですが、ほとんどそういう目的に使われている宝篋印塔はなくて、大体は誰かの墓前を弔うという形で作られております。うちの宝篋印塔も宝篋印陀羅尼ではなく、ある方の菩提を弔う、伝馬通り辺りに色町があったそうなんです。私よく知りませんが、そこを取り締まりしていた方の二号さんの為に建てたというふう聞いておりますけれども宝篋印塔があってそのこちらに来ると不老庵の碑というのがあります。不老庵の碑というのは、不老庵というのは号でありまして、この辺で有名なお茶の宗徧流、その茶人だった方の碑を宗徧の方達が建てたものだそうです。

それから倉橋源兵衛翁の碑、これは明治時代の岡崎の財界人と書いてありますけれども、菅生町で肥料屋さんを起こしておった方だそうです。明治の時代ですね。

その隣、お地蔵堂があるんですけども、お地蔵堂の隣辺りに渡会茂作の碑、これは渡会さんという龍海院の昔からの檀家総代をしていらっしゃる方なんですけれども、その方が渥美から出てきてどのようにして岡崎で生業をしたか。伝馬通りと言いますと、六地蔵町と伝馬通りの間ですね、あの間に渡会医院という病院が以前ありました。あそこの先々代の方が渡会茂作になるんだそうです。

最後にお地蔵堂の隣に寺井先生の碑というふうにかかれていたのがありますが、寺井先生というのは、寺井キカク、江戸の岡崎屋敷、岡崎藩江戸上屋敷の学問所で塾長をしておった人。允文館を建てる折に、江戸の岡崎藩の学問所の塾長をしていた方を岡崎の允文館に呼んだわけですね。それで明治二年に岡崎に移って、藩校允文館の教授になったということです。允文館が康生にありまして、これは岡崎藩の藩士の為の学校であった。それから市の学校、つまり岡崎市民の子弟の為の学校はいわゆる御馳走屋敷、てんま公設市場がありました、あそこに御馳走屋敷というのがあったんですけれども、あそこに市学校というのが造られて、一般庶民の子弟の為に学問を教えていたそうですね。

あとそこからお墓の方に入っていく所に、レジユメの7番目なんですけれども、峰沢啓三先生の句というのがございます。峰沢先生ってこの婆娑羅大王の絵も描かれた、これ寄贈していただいたのでちょっと外してきてここに置いたんですけれども、画家であり、俳人であり、うちのお檀家であり、あと岡崎女子短期大学の講師をやっていた方なんですけれども、その方が、「天蓋が揺れ 一山の若葉ゆれ」という句を書かれました。

それを句碑として残しております。天蓋というのは、この支柱にあります上からぶら下がっているやつですね。本堂で座っておったら5月ぐらいのことでしょうね。薫風の頃のことでしょう。本堂で座っておったらずっと天蓋の瓔珞が揺れた。あっと思って外を見たら全山の、一山の若葉がそよそよと揺れていたと、そういう状況を詠んだものだよというふうに啓三先生が教えて下さいました。まだ亡くなられて10年ぐらい、10年経ってないぐらいですかね。

4. 願生

ここの曹洞宗、永平寺を本山とする曹洞宗の寺院でございます。道元禅師という方が永平寺を開かれたんですけれども、中国へ渡られて禅を学んで帰ってきた。中国へ渡られるといろんな書物ですとか経文ですとか、そういったものをたくさん持ち帰るんですけれども、道元禅師は何も持たずに帰ってきたんですね。何をもち帰ってきたんですかと言ったら、空手還郷だ。空手で郷里に還ったよ。空手還郷というふうに答えたんですね。じゃあ何を学んで来たんですかと聞いたら、眼横鼻直を学んできたと言っんですね。眼は横に付いており、鼻は縦に付いている。眼横鼻直を中国で学んできたというふうに答えたという方。これが禅のひとつの極致の表現なんでしょうね。眼横鼻直を学んできた。その道元禅師が説かれた書物の中に正法眼蔵というのがございます。レジュメの8番に書いてあるんですが、その正法眼蔵の中に「願生」という言葉がございます。願いによって生まれる、これが願生ですね。これは道元禅師の誕生観を示しているものなんですけれども、私たち一人ひとり願いによって生まれてきた、そういう存在なんだと。問題なのは誰の願いによって生まれてきたか。お父さん、お母さんが子供が欲しい、おじいちゃん、おばあちゃんが孫が欲しいという、この願いによって生まれてきた。それはもちろんですけれども、道元禅師が言われているこの願いというのは、まだ影も形もない自分自身がどうしても私を人間として誕生させてください。人間として誕生してどうしてもやりたい夢があるんです。どうか私のこの願いを叶えてくださいという、自分自身の願いによって生まれてきたのが私たち一人ひとりの存在なんだというのが、この願生が示す意味なんですね。ですからよくテレビドラマなんかで決まり文句で「誰のお陰で大きくなったと思ってんだ!」「別に生んでくれて頼んだ覚えはねえや!」という台詞がありますけれどもそれは違うんですね。まさに自分自身が生んでくれと頼んで生まれてきた存在が私たち一人ひとりの存在なんですね。どうしてもやりたい夢があった筈なんです。じゃあその皆さん一人ひとりの生まれ出づる時に持っていた願い、夢というのは一体何だったのか。今日のこの勉強会でもう一度自分自身に、自分の誕生の折の夢は何だったか、そういうことを自分自身に問いただす、こういう機会にして頂ければ、このように最後はちょっとお坊さんらしく締めて講演を終わらせて頂きます。

どうも拙い話で皆様こういうことに興味のある方ばかりなので、私の知っている以上のことを皆さんの方がきっと知っているんじゃないかと思いながら、冷や汗をかきながら話させていただきました。また、何か皆さんが知っていることがあれば教えていただいで、一緒に勉強をしていけたらなとこのように思います。長時間ご静聴どうもありがとうございました。